

# 日本語方言の否定表現について

神部 宏泰

## 1. 本調査の項目とねらい

否定の表現法は、日本語の諸表現法の中でも、際立った分野を占めて存立している。ただ、否定の表現が、存在の認識を、あえて打ち消すところに成立するとすれば、その広がりには大きく、他の分野の諸表現法とのかかわりも少なくない。いわば婉曲の表現として、他の表現法の核心部に、これが一定の位置を占めている例も多い。例えば、勧誘や要求の表現で、「いっしょに行かないか。」「これをくれないか。」のようにあるのがそれである。二重否定の表現にしても、これを肯定の表現——とは言えないとしても、屈折した内面は複雑である。このようなしだいで、否定表現法の枠組みの認定は容易でない。

本書の調査項目の選定にあたっては、上述の枠組みに配慮しつつも、否定形式の広がりにも留意して、ややゆるやかにとりあげることにした。例えば、ここに項目化した「不可能の表現」「禁止の表現」にしても、厳密な意味で否定の表現とは言いにくからう。そのような方針にもかかわらず、漏れた事項も少なくない。上述の二重否定の形式にしてもそうである。語の次元での「不」「非」「無」など接辞に関する諸形式も留保した。その点でも、なお整備の余地がある。

否定の表現は、基本的には否認・否定の心意に支えられているだけに、意味作用がかなり複雑である。この作用を踏まえて、さらに新しい表現へと展開することもある。このような表現上の機微を追求することが、否定表現法討究のために重要であることは多く言うまでもない。ただ、今回の調査は、そのような外面・内面にわたる追求のための、統一的な資料を得ることに主眼がある。上述の討究に耐えるためには、資料が生きていなければならぬ。どの調査項目についても、会話の文脈で把握することを重視したのも、このような配慮に基づいている。さらに注意すべきは自然の会話であって、ここには当該事象の自然の用法・作用が観察されるだけでなく、項目調査で捉え得なかった、特殊な事象とその働きの認められることがある。

調査項目の立案者として、反省すべきことも多々ある。実際の調査の場に臨んでみて、項目と、それについての問いの文言が、不適切であると認めざるを得ないような場合があった。この点については不明をお詫びするばかりである。それにもかかわらず、諸氏の寄せられた調査成果は実にみごとである。北海道方言から沖縄方言まで、それに海外の事例をも含めて、ここに収集された「否定の表現」は、単に資料というだけでなく、全国方言にわたる否定表現法の統一的な記述として、今後、学界に一定の位置を占めるものと確信するしだいである。

以下には、調査項目の特定分野について、注意すべき諸問題を集約的にとりあげ、形式本位に、成果の一斑を概観することにした。

## 2. 調査成果の収束

### (1) 助動詞「ない」による否定表現

「動作・作用の否定表現」の項でまず問題になるのは、「動詞未然形＋否定助動詞」形式のものであろう。その否定助動詞の「ない」が国の東部に、「ん」が西部に分布する事態については、一般によく知られている。

その東部で、「ない」は、日常は「ネ・ネー」と実現するのが普通である。例えば、「行かない」は「イガネ」[彌]、「イカ°ネー」[謙・炯]であり、「降らない」は「フラネ」[彌]、「フンネー」[謙・彌]である。ちなみに、「フンネー」のように、ラ行五段活用動詞の未然形語尾「ラ」が撥音化する例は、関東域及びその周辺によく見られる言い方で、特殊な音効果が注意をひく。

東部でも「ん」のおこなわれることがある。「行きません」の「イキ°マセン」[鷗・燦]はその例である。弘前には「イゲヘン」があるが、これについて調査担当者（渡辺修平氏）は、「『ヘン』は動詞の丁寧形を作る『～マ(シ)』の未然形『(セ)→ヘ』に否定の『ン』がついたものと考えられる。」と述べている。

ところで、丁寧のような特定の言い方の場合でも、「イガネガンス」「イガネス」のように、「イガネ」が「ガンス・ス」をとる例[彌]が報告されている。これに関して、本調査には見えないが、山形の庄内には「ガンスネー。」（そうではありません。）があるようである（藤原与一『方言学』p.225）。これは、上とは逆に、「ネー」が「ガンス」の後に接しているのが注意される。

### (2) 助動詞「ん」による否定表現

主として国の西部に分布する「ん」は、全般に「行カン」「降ラン」のようにおこなわれる。本調査には現れなかったが、島根県隠岐島には、「エカヌ」「フラヌ」のように用いられる「ヌ」がある。これが当該形式で最も古い事象であることは言うまでもない。これがさらに「エカノ」「フラノ」のように「ノ」ともなっている。この「ノ」が「ヌ」からの変化形 (nu>no) であることはほとんど疑う余地がない。当方言には〔éno〕(犬)〔tanoki〕(狸)などのように nu>no の広母音化傾向が顕著であり、当面の助動詞「ノ」も、この傾向に支えられた現象とみることができる。鳥取県西部の東伯郡下にもこれがある（室山敏昭氏による）。

静岡県の大井川上流域に、万葉古語法の「なふ」の残存形「ノー」が存することはよく知られているが、今回の調査でも、本川根町田代の「行カノー」「降ラノー」が報告されている（山口幸洋氏）。これが「なふ」由来の形式とすれば、先述の「ない」の項目下にとりあげるべきものであろう。

大阪・京都を中心とした近畿一帯では「ヘン」が一般的である。「行ケヘン」「降レヘン」、「行カヘン」「降ラヘン」はその例である。この形式が、本来は強調形式であった「行きはしない」「降りはしない」の「行キヤーセン」「降リヤーセン」に発するもので

あることは改めて言うまでもなからう。その強調形式が一般化して「～ヘン」が成立し、旧来形式の「～ン」がしだいに衰微し、主情的な特殊性を帯びてきている。なお、「行きはしない」のように「は」の機能した強調の言い方は、東北及び北陸に存しない。

### (3) 過去・完了の否定表現

「動作・作用の否定表現」の過去・完了の形式について概観しておきたい。東部域の大半は「行カナカッタ」系のものである。「イガネガッタ」が主として東北圏にあるが、これは、「イガネ+ガッタ」であろうか。慣習化した「行かない」の「イガネ」が、「ガッタ」をとったものか。

西部域になると、形式とその分布はやや複雑である。その詳細については今はふれませんが、大観して注意されるのは、近畿を中心に、広く分布する「行カナダ」である。その「行カナダ」の西の周辺に交わる状態で「行カザッタ」がある。山陰の「行カダッタ」九州の「行カジャッタ」は、これに何らかの関係があるか。ただし、それぞれが、断定助動詞の完了形「～ダッタ」「～ジャッタ」の分布する地域に、ほぼ重なっているのも留意すべきであろう。

西部域のこれらの地域を大きく覆う状態で「行カンカッタ」が分布する。これが、どの地域でも、若年層のものとしている点が注意される。上述した東北の「行ガネガッタ」とこの「行カンカッタ」とが、成り立ちの発想をほぼ等しくしているかにみられるのも興味が深い。

### (4) 存在否定の表現

非存在の概念を表す主要な形式は、形容詞「ない」が述部に立つ「～が(は)ない」であるが、この形式は、ほぼ全国にわたって一般的なものである。「コレシカ ナイケドネ。」は北海道石狩の例である。このような「ナイ」は、関東・関西域それぞれに、どの程度にか存立する。「ナイ」が「ネ・ネー」と転化したものも、東北・関東域中心に広く分布している。「ネー」に至る過程の音と言うべきか、「ナエー」が見られるのは主として山陽及び東海西部である。九州西部の「ナカ」(コッダケシカ ナカ ダイ。[麟剛])は、これとして地方性をよく見せるものであり、また、関西の「アラヘン」「アレヘン」も地域の特异性をよく見せている。

過去・完了形式は、これもほぼ全国にわたって「ナカッタ」である。ただ、主として東北には、その変化形である「ネガッタ」がある。「コドシア ヨニ アズ トシ ネガッタナ。」(今年のように暑い年は無かったね。)は盛岡の例である。「アラヘン」「アレヘン」のおこなわれる関西域には、「アラヘンダ」「アレヘンカッタ」もある。なお、弘前に「ナクテアッタ」、静岡本川根に「ナカッケ」があるのが注意される。

### (5) 状態否定の表現

状態否定表現の一形式として「形容詞連用形+ない」がある。本調査の一項目「暑くない」について見ると、おおむね国の東部域に「アツくない」系、西部域に「アツーない」

系が分布する。すなわち形容詞連用形「〜ク」が東部域に、そのウ音便形「〜ウ」が西部域に分布するということであって、この事態は、すでに周知のところであろう。なお、今は、例えば東部の弘前で「ヌグクネ」などと言っているような、形の上での詳細については、ふれないことにする。

主として関東域及び隣接する西側一帯では、「は」の融合した強調の言い方「暑くはない」を「アツカナイ（ネー）」と言っている。ところで、関東域及びその周辺では、「暑くない」についてもこのように言うところが多いらしい。つまり、両者に形式上の区別がないわけである。ただし群馬の藤岡については、「『暑くない』と『暑くはない』の区別は、アツカネーとアツカーネーで表現されている。（中略）長音を取り立ての意を表していると考えられる。」という調査担当者（篠木れい子氏）の注記がある。なお、近畿圏では「アツナイ」のように、「アツ〜」を短縮する言い方が一般である。

状態否定表現の一形式として、また「形容動詞連用形+ない」がある。本調査の当該項目「にぎやかでない」について見ると、「ニギヤカデナイ（ネー）」が、濃淡密疎の差はあるものの、ほぼ全域に分布する。その他の形式で注意されるのは、主として山陽道に、「ニギヤカニナー」のように、「〜ニない」が見られることである。九州佐賀にもこれがある。

特説機能の「は」の融合した強調の言い方「にぎやかではない」は「ニギヤカジャナイ（ネー）」が一般的である。さて、主として関東域では「にぎやかでない」もこのように言うところが多い。前者の強調の言い方が一般化し、両者に形式上の区別がなくなっているわけである。なお、群馬藤岡については、担当者が、「取り立ての『は』の働きは長音が担っている。」と注記している。すなわち「ニギヤカジャナイ」と「ニギヤカジャーナイ」の、形式上の区別を指摘している。関連して、近畿圏では、上の両者とも「ニギヤカヤナイ」とあるのが一般である。

なお、近畿圏では、別に「ニギヤカトチガウ」「ニギヤカチャウ」も盛んで、よく地域の特殊性を示している。

### 3. 否定表現法研究への期待

本書で整頓した調査項目は、既述したとおり多岐にわたる。しかもその調査地点がほぼ全国に及んでいて、これまでに類を見ない、貴重な研究資料とすることができる。本論でとりあげた諸事項は、当座の調査のまとめとして、その一斑を問題にしたにすぎず、しかも概括的な展望にとどまっている。本資料が、これからの本格的な否定法研究のために、なおいっそう重要な役割りを果たすことを念じてやまない。

否定表現法の世界は、上来見てきたとおり、多彩で自在性に富んでいる。その否定表現を内面から支える心意も機微で複雑である。例えば、婉曲の表現として、命令、勧誘、依頼など要求の表現におこなわれがちな否定形式の類型とそれを支える表現心意の問題。あ

るいは古形式の助動詞「まい」の衰退の様相——分布面の縮小につれて生起する、意味、用法の特殊化の問題。さまざまに追求すべき事項は多い。これらについても、本論では未着手のままである。

本書が、上述等の諸研究の推進のために、有効な役割りを果たすことを、重ねて期待してやまないしだいである。